

<Ⅹ 研究ノート>

手芸研究室の編み地見本 その4

正地 里江*¹

1. 卒業アルバムにみる手芸実習

東京家政学院短期大学手芸研究室が所蔵していた編み地見本について、その制作年代や使用時期、使用された授業科目などに関する手がかりは未だ得られず、詳細が判明していない。授業や実習で学生に見せたり、作品制作の参考に使用したりしたのではないかと思われるので、実習風景の写真に手がかりがないか、短大の卒業アルバムを調べてみることにした。本学図書館で短大、大学、短大以前に開設された東京家政専門学校の卒業アルバムを保管している。編み地見本の状態や一緒に保管されていた物などから昭和30～40年代のものではないかと推察していることから、今回は短大1回生が卒業した昭和27(1952)年から24回生が卒業した昭和50(1975)年までのアルバムの写真を確認することにした。

残念ながら2回(昭和28年)、4回(昭和30年)、7回(昭和33年)の3冊は保管されておらず、全部で21冊となったが、実習風景として手芸実習を行っている写真が21冊中17冊、自由スナップで編み物を行っている写真が1冊に掲載されていた。しかし、編み地見本が写っている写真は見つからず、また、肝心の昭和30年代半ばの昭和34～36年には手芸実習の写真掲載そのものがなかった。実習風景の写真は学生が作業に取り組んでいる姿を残すことが目的なので、教材などが写っていても仕方がないと言わざるを得ない。さらに、授業や実習ではなく、クラブや同好会の活動などで制作されたり活用されたりした可能性もあるのではないかと思い、それらの写真も確認したが、関連しそうな手芸部や編み物同好会などはなく、もちろん編み地見本が写る写真もなかった。なお、短大には同時期に別科があり、卒業アルバムは別に作られていたので、そちらも何冊か確認したが、手芸実習の写真掲載はあっても編み地見本が写っている写真は見つからなかった。

とはいえ、せっかく古い卒業アルバムを見られる機会を得たので、その中からいくつか手芸実習の写真を掲載させていただくことにした(写真1～写真8)。



写真1 昭和29(1954)年



写真2 昭和31(1956)年



写真3 昭和32(1957)年

*正地 里江(しょうじ さとえ) 令和2年度現代生活学部助手

昭和29(1954)年の実習風景が一番古いもので、ギッシリと学生が座り、教員が見回るなか、黙々と作業している様子が写されていて、どこことなく緊張感が漂っているようにさえ見える。それは昭和30年代前半も同様であった。第2報で短大学生便覧にみる手芸に関する記載をまとめたが、昭和36年度の実習内容に「手芸の基礎的知識と技能、その応用並びに利用、更生法を授け、美的観念を養うと共に忍耐と時の尊さを知らせる」という部分があり、この記載に相当する時期より前の実習風景の写真であるが、知識や技能だけではなく、忍耐と時の尊さを知らせるという精神面の教育もなされていたであろうことが感じとれる。

しかし、昭和30年代後半から昭和40年代前半にな

ると少しずつ雰囲気が変わり、昭和40年代後半になると緊張感は薄れている。昭和30年代前半までは制服着用の学生が多いことや昭和40年代後半は笑顔で写っている学生がいることなども写真の雰囲気に影響しているかもしれないが、この時期は高度経済成長期にあたり、人々の暮らしが豊かになり、世の中に手芸ブームが起こった時期である。便覧の記載も昭和44年度には「忍耐や時の尊さを知らせる」という記載がなくなり、さらに昭和49年度には「個性と創造を重視」という言葉が加えられている。暮らしの豊かさとともに自由な雰囲気が学生にももたらされ、授業ではあるがブームの手芸をやってみようという気軽な感覚もあったかもしれない。在学中の様子や思い出を残すための卒業アルバムであるが、その写真に時代の変化が映し出されていることを期せずして見る事ができたように思う。

2. 制作年代の推察

編み地見本には、模様を表わす名称の小さなタグが付けられていて、すべて手書きで記入されている。No.1～76までのタグの中で、名称に「応」とつけられている3つは「応」が旧字体の「應」と書かれている。また、「芭蕉」「唐草」「鈴蘭」など草冠がつく漢字のある6つは「+」のように草冠を分けた書き方になっている(写真9)。



写真4 昭和37(1962)年



写真5 昭和38(1963)年



写真7 昭和46(1971)年



写真6 昭和43(1968)年



写真8 昭和49(1974)年

「應」のような旧字体は、昭和24（1949）年に当用漢字字体表が告示され、新字体に改められている。このことから、編み地見本が昭和30～40年代に制作されたとする場合、昭和40年代では当用漢字字体表の告示から10年以上経過し、この頃にわざわざ旧字体でタグに記入することは考えにくく、昭和40年代に制作された可能性は低くなり、昭和30年代に制作された可能性が高くなる。昭和24年に当用漢字字体表が告示されたからといって、それ以前や切り替わる頃に文字を修得した場合は日常的に使用する文字をすぐに変えるとは考えにくく、昭和30年代、さらに30年代前半であれば、まだ旧字体を使用する人が多かっただろうと思われ、教員は新字体への変更を意識して行っていたかもしれないが、まだ旧字体をそのまま使用することもあっただろうし、学生も旧字体を学んだ年代である。編み地見本を制作したのが教員か学生かは分からないが、昭和30年代前半であればタグの記入に旧字体を使用する可能性は大いに考えられる。また、少し年代は前になるが、昭和28（1953）年の別科の卒業アルバムの実習風景の写真には「手藝」と旧字体が使われていた（写真10）。「藝」の字を使用しているのはこの1冊だけであったが、当用漢字字体表

の告示後4年経っていても、卒業アルバムを制作した会社も、アルバム委員の学生も、確認したであろう教職員も、まだ「芸」を「藝」と書くのが普通で、「手藝」とすることに違和感はなかったのだろう。これらのことから、この編み地見本は昭和30年代前半に制作されたのではないかと推測することができる。しかし断定はできず、さらにそれ以前に制作された可能性もないわけではないので、本当に何かしら手がかりが欲しいものである。

3. 編み図について

今回はNo.38からNo.59までの22種類を掲載した。ほとんどが透かし模様で、2目一度とかけ目だけの組み合わせが多く、なかには複雑なものもあった。

編み図は、日本ではJISで編み目記号が決められ、JIS記号を使って編み地を表示する時は、表側から見た編み図と決まっている。そのため、一段おきに2目一度やかけ目などの記号があれば、その段を表から見て編むようにすれば作業しやすいが、一段ずつ記号がある場合には裏から見て編まなくてはならない。仕上がりにしては表から見て編んだ時と同じになるが、編んでいく際には注意しなくては間違った仕上がりになってしまう。No.39、45、47、56、59などがそうで、編み図を起こしたあとの試し編みでは少々苦勞した。

No.42は2目分を編まずに飛ばす編み方になっている。いくつかの編み方を解説した書籍などにこのような編み方の記載はほぼ見られなかったが、棒針編みではなく機械編みに「針抜き」という技法があり、この仕上がりがNo.42と同じである。「針抜き」とは、家庭用編み機で編むときに一部の針を抜いて糸を編まないで渡らせる編み方の一つで、ゆるめに編むことができる。機械編みの技法であるため、棒針編み関連の書籍に記載がないのは当然である。「針抜き」は機械編みの技法ではあるが、これを棒針編みで行うこともできる。かけ目をして編まないか、表編みで編んでおいてあとから目を落とす（その目だけほどく）方法である。かけ目で行くと棒針に糸を掛けているだけなのでゆるみやすく、糸の引き具合で間隔が変わりやすい。あとから目を落とす方が一旦編み目が固定されるので、比較的均一に仕上がる。といっても、どちらの方法でも目がゆるみやすいので、仕上げの際に整える必要があるが、編み地見本では間隔が揃い、きれいに仕上がっている。試し編みで、あとから目を落とす方法を行った際、2目分を落とすと思った以上に間隔があいてしまったため、2目分を1目にしたら編み地見本のような間隔の仕上がりにすることができた。機械編みは昭和



写真9 No.56 芭蕉應用



写真10 昭和28(1953)年別科

30年代に家庭でも盛んに行われていたそうで、手芸ブームの時期と一致する。これだけの編み地見本を制作できる人であれば、機械編みの使用経験や知識もあると思われ、この編み地見本に取り入れたのかもしれない。なお、「針抜き」は棒針編みの技法ではないが、今回はJISの家庭用編機編目の針抜きの編目記号を用いて編み図に表した。

No.44は編み込み模様、No.58は透かし模様+編み込み模様で、1段ずつ糸の色が変わっている。2段ごとの色変えであれば、表編みと裏編みの往復になり、同じ色の糸で続けて編むことが容易にできるが、1段ごとに糸を変える場合、留めのない編み棒（または輪針）を使用して、表・表・裏・裏…と糸を変えて編む必要がある。No.44と58の場合は、必ず浮き目や滑り目を裏編みで編む段がでてきた。模様を編む際に常に表側を見ながら編めれば楽なように思えるが、それでは表現できる模様が制限されてしまう。編み物に関連した書籍などでは表編みでの方法しか掲載されていないことが多い

め、多彩な模様を制作できるようにするためには、裏編みでの模様の編み方も確認しておく必要がある。

今回もさまざまな模様があり、編み方の組み合わせで多彩な表現ができる編み物の面白さを改めて感じることができた。

参考文献

- 1) 鈴木勉『家庭画報実用事典2 編みものと手芸』（世界文化社、1980年）
- 2) ジュディ・ブリテン『手芸の百科 ヨーロッパの伝統的技法のすべて』（文化出版局、1981年）
- 3) 小瀬千枝『編み物教室の現場から こんな基礎編みの本が欲しかった!』（文化出版局、2003年）
- 4) 小瀬千枝『小瀬千枝のニットパターンワールド500』（文化出版局、2010年）
- 5) 瀬戸信昭『いちばんよくわかる 棒針あみの基礎』（日本ヴォーグ社、2010年）

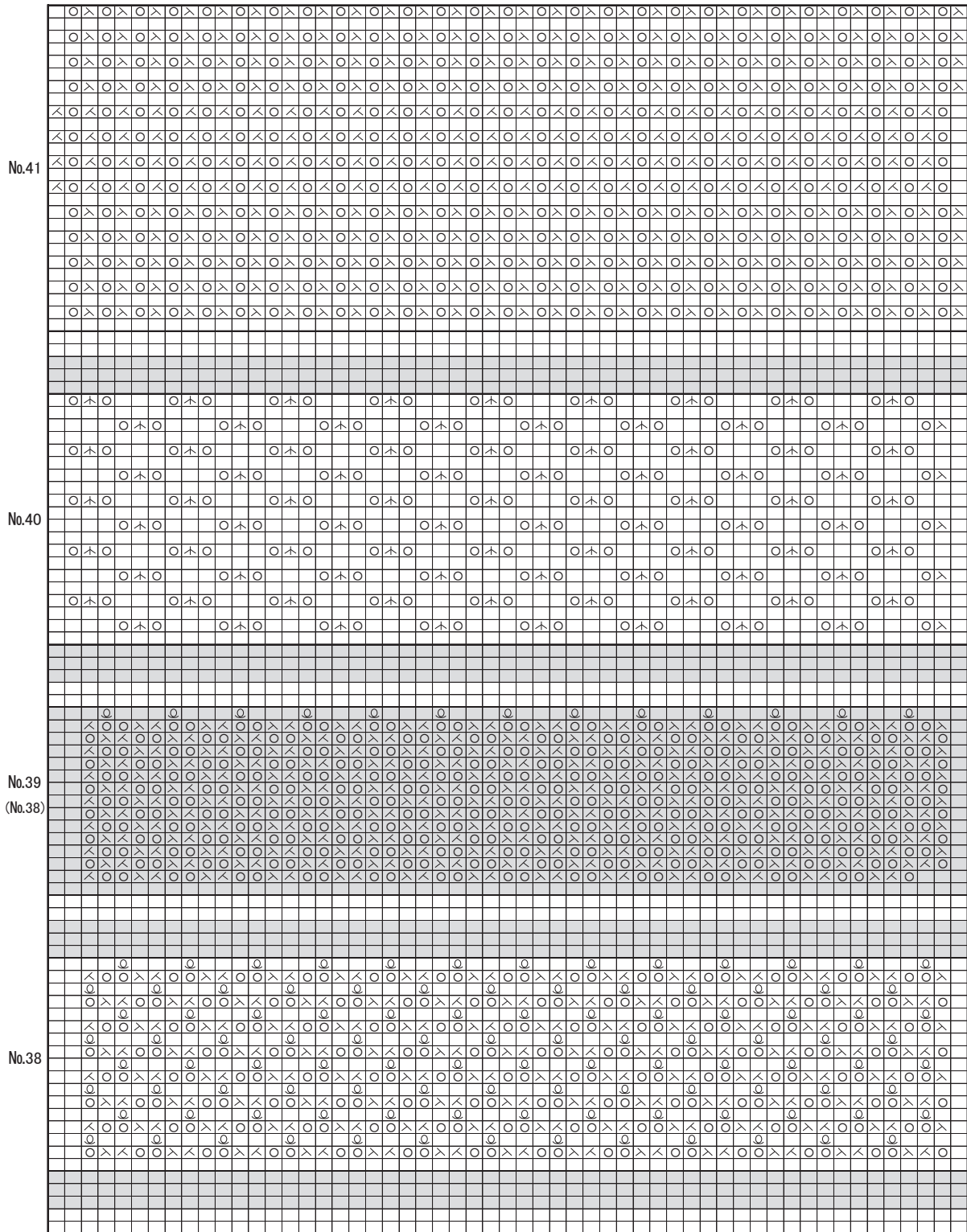


図1 編み図 No.38 ~No.41 ※ () はタグNo.

※図1~5 編み図の編目記号

- | | | | | | | | | | | | |
|--------------------------|------|---|-----------------|--------------------------|-------|--------------------------|---------|--------------------------|---------|--------------------------|---------|
| <input type="checkbox"/> | :白 | <input type="checkbox"/> = <input type="checkbox"/> | :表目 | <input type="checkbox"/> | :裏目 | <input type="checkbox"/> | :右上2目一度 | <input type="checkbox"/> | :左上2目一度 | <input type="checkbox"/> | :中上3目一度 |
| <input type="checkbox"/> | :エンジ | <input type="checkbox"/> | :かけ目 | <input type="checkbox"/> | :ねじり目 | <input type="checkbox"/> | :浮き目 | <input type="checkbox"/> | :すべり目 | | |
| <input type="checkbox"/> | | <input type="checkbox"/> | :針抜き(家庭用編機編目記号) | | | | | | | | |

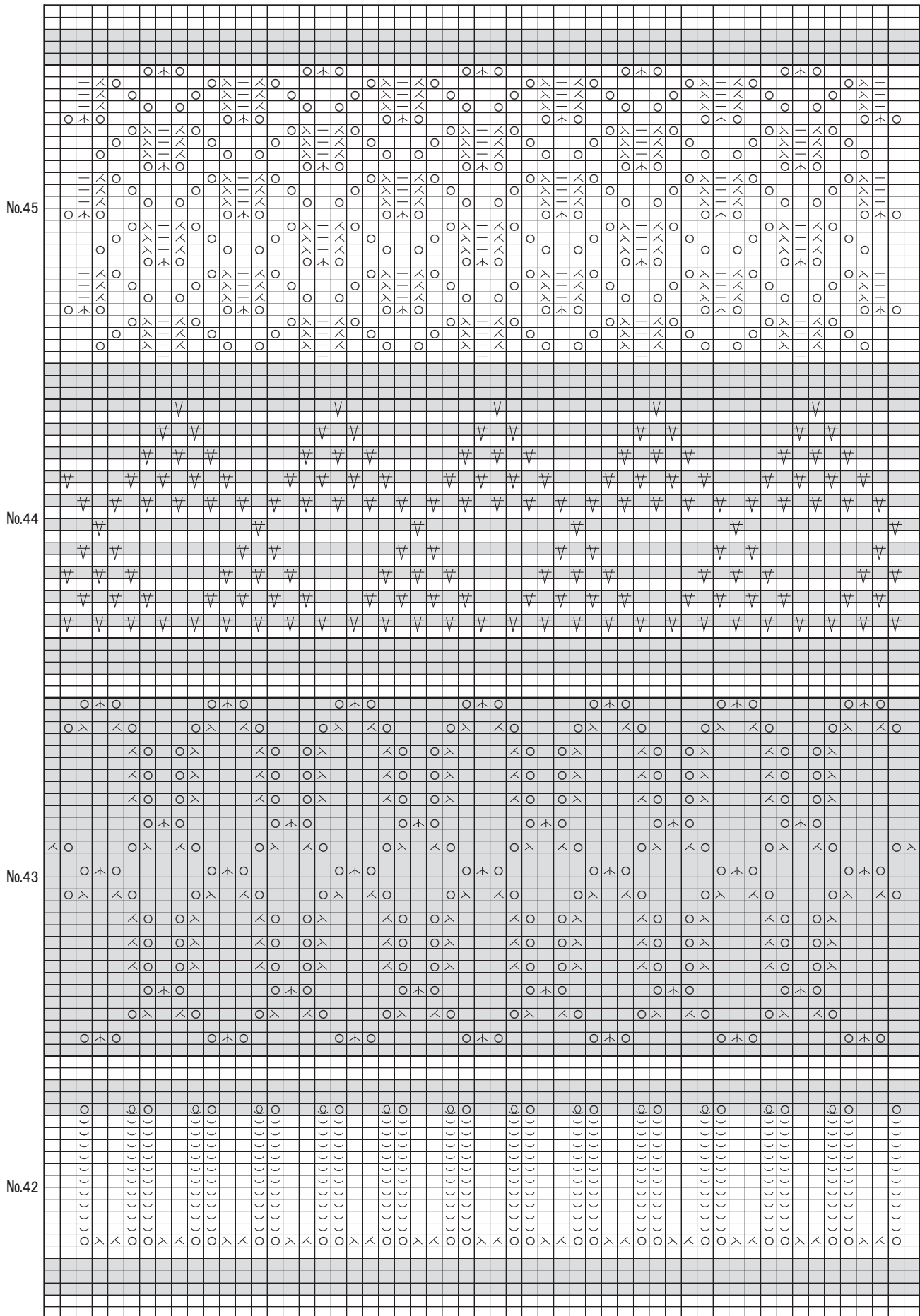


図2 編み図 No.42 ~No.45

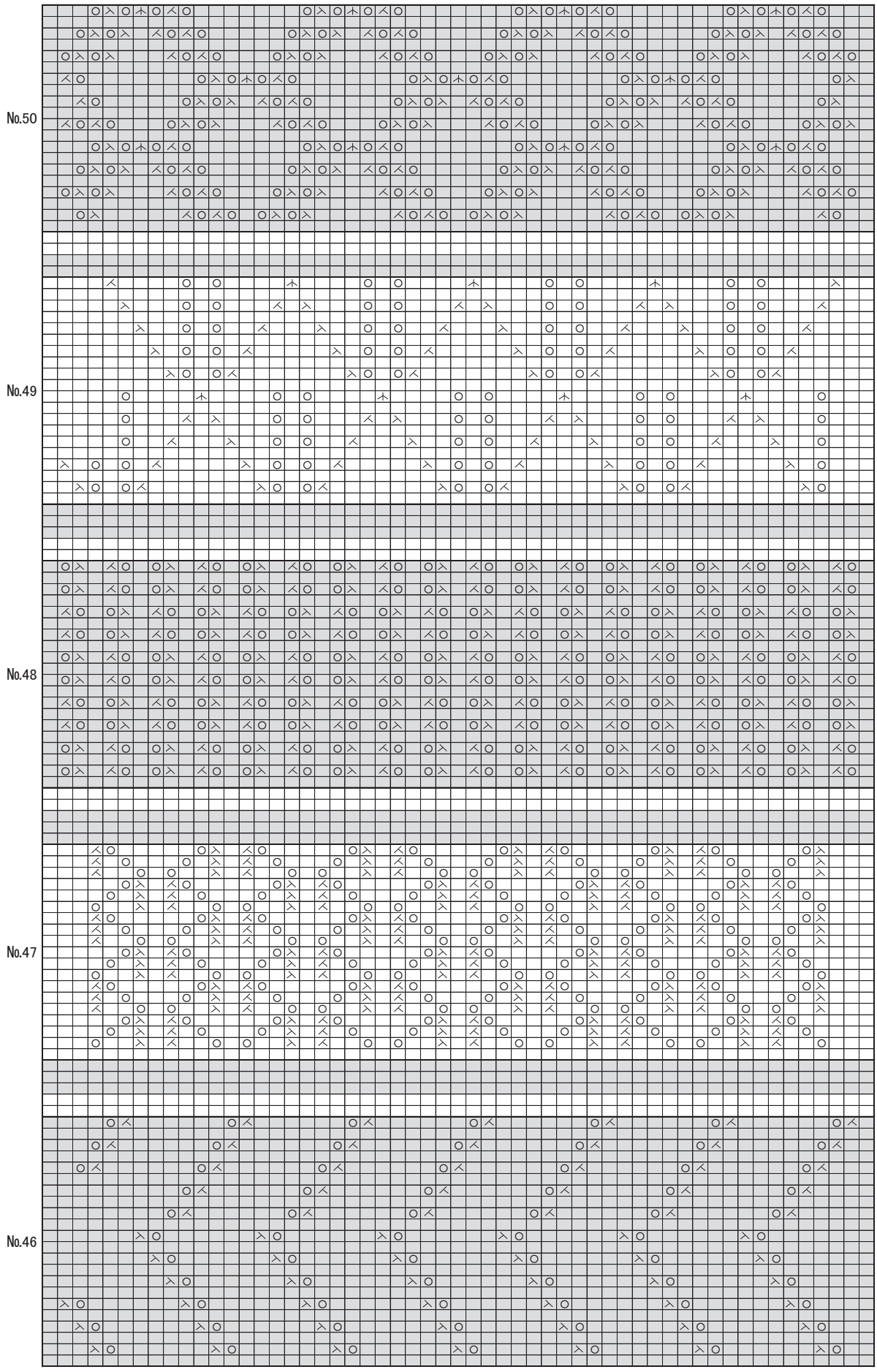


図3 編み図 No.46 ~No.50

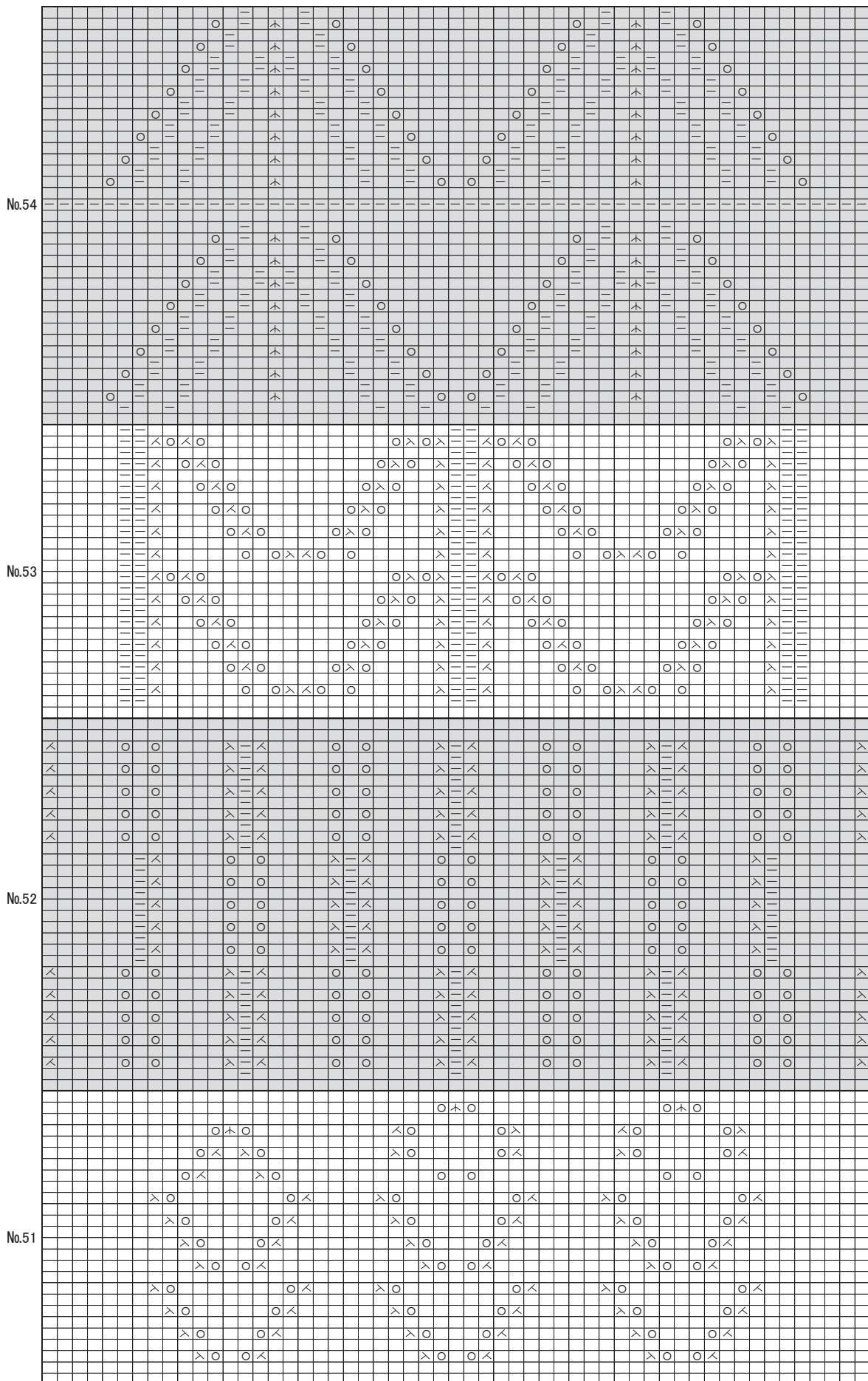


図4 編み図 No.51 ~ 54

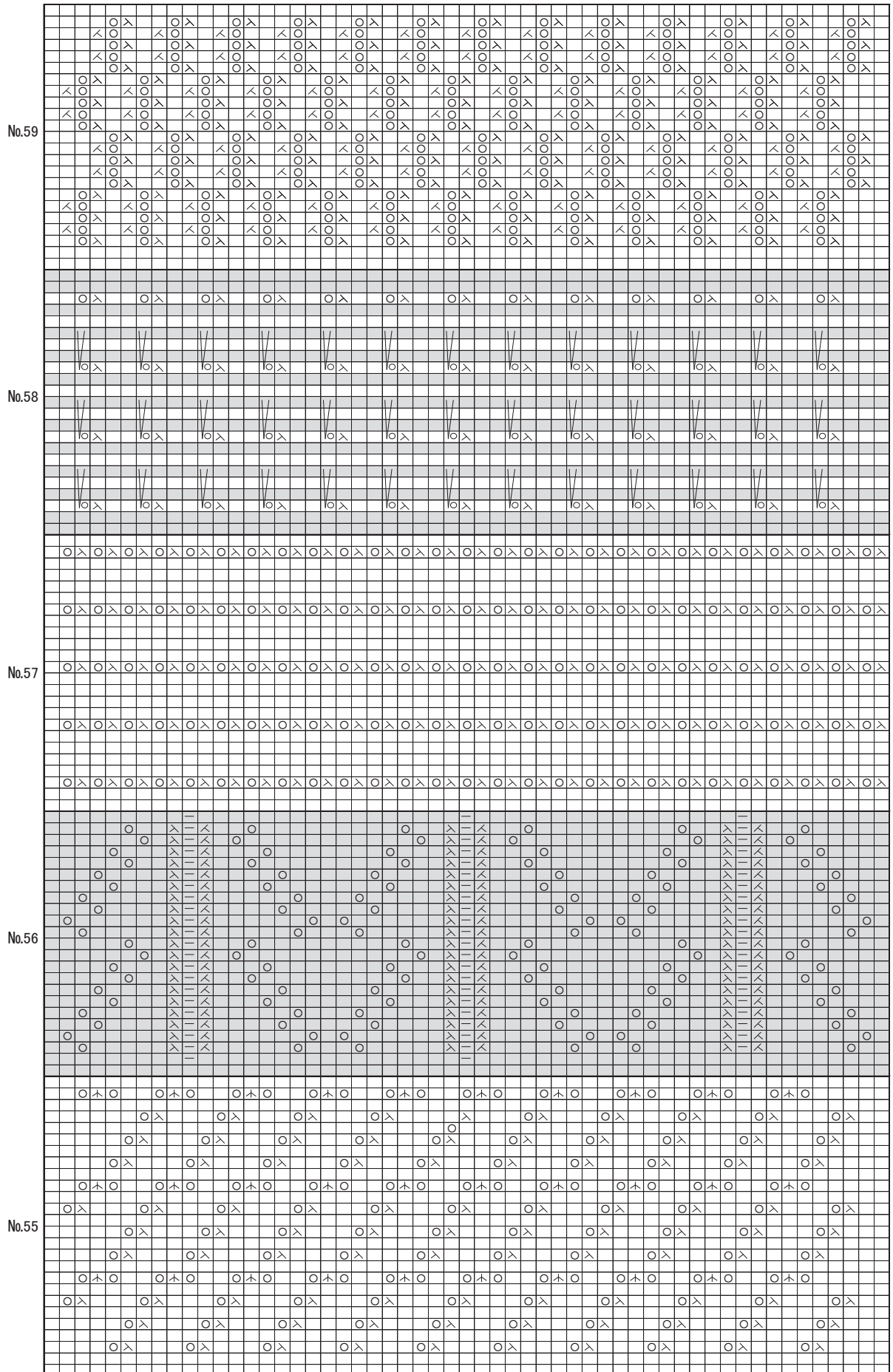


図5 編み図 No.55 ~No.59